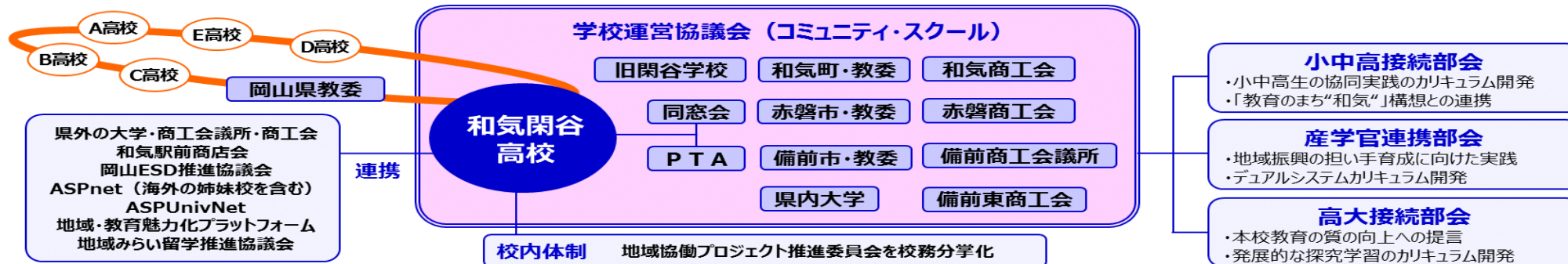


研究開発構想名：「恕」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成

本構想の目的は、「地域と協働する探究人」を包括的に育成することである。「地域と協働する探究人」とは、自己の在り方・生き方を探求し自己成長と地域貢献を融合した人生をデザインし、SDGsを意識しつつ、身の周りや地域課題を主体的に探究し、地域に貢献できる人物である。この目的のため、各教科・科目、総合的な探究の時間、課外活動の3領域を通して、「7つのチカラ」（自分を理解する力、職業とつなぐ力、考える力、行動する力、コミュニケーション力、チームワーク力、自立する力）の育成を目標とする。将来にわたり探究心を持ち、身の周りや地域の課題の解決策を提案する等、地域に貢献する人材を持続的に送り出すことが期待できる。



令和3年度の目標

年次計画
2021
各教科等の探究型カリキュラムの成果普及

各教科・科目

- 7つのチカラを反映させた長期ルーブリックを各教科で運用し、検証する。教務課研究開発室を中心に、ICT活用授業と教科横断型授業を推進し、取組を学校ホームページで普及する。
- 学校設定教科・科目「地域協働探究」を開講し、地域の事業所において通年の長期就業体験実習等を実施する。

課題解決型探究学習「閑谷學」

- 各年次の年間指導計画を作成し、実施後検証する。
- 7月に2・3年次生探究学習発表会を公開する。3年次生は卒業探究論文集を作成する。

課外活動

- これまでの活動を継続しつつ、地域からの要請のあった様々な活動に積極的に参加する。
- 近隣高校との探究学習発表会に生徒を派遣する。

コンソーシアム及び各部会等

- コンソーシアム（＝学校運営協議会）及び各部会を年3回、校内の担当者会議を週1回程度、校外実務担当者との連絡会を隔週程度開催する。

取組状況

各教科・科目

- 全教科の長期ルーブリックをiPadで生徒に配布し、活用した。
- 授業実践報告をホームページにアップした。
- 「地域協働探究」を履修する3年次13名が、地域の事業所で全6回の就業体験実習を行った。うち2回はコロナの影響で校内実習に変更した。

課題解決型探究学習「閑谷學」

- 1年次生は地域の方に企画・運営を依頼し、地域を知るバスツアーを実施した。
- 単元Ⅱグループ探究と単元Ⅲ個人探究の区切りとなる7月に探究学習発表会を実施した。2年次生のグループ探究を1年次生が引き継いで活動を行った。

課外活動

- 県主催「高校生探究フォーラム」の参加（12月）。取組の成果を共有。

コンソーシアム及び各部会等

- 学校運営協議会と3つの部会を各3回（オンラインまたは書面開催を含む）開催し、本校の地域協働カリキュラム開発等に関する協議を行った。
- 校外実務担当者との連絡会は実施することができなかった。

成果と課題

各教科・科目

- 教科横断型の授業、パフォーマンス課題ともに7割以上が実施（R3「授業工夫アンケート」より）。授業の質向上が計られている。
- 現3年次生の3年間の推移では、主体性に関わる項目の伸びが顕著に表れ、自己肯定感も高まっている（R3「高校魅力化評価システム」より）。
- 各教科の長期ルーブリックを生徒が主体的に活用できる手だてが必要である。
- 「地域協働探究」の授業を通して、地域との関係性、生徒の意識、生徒の資質能力の向上が見られた。

課題解決型探究学習「閑谷學」

- R2年度から単元編成を学年またぎで行うものに変更したことにより、学年によるばらつきやテーマの継続性担保という課題が解消されつつある。
- 地域での実践を伴う探究は本校の特徴であり、ほぼすべての生徒が何らかの実践を行っているが、アクションが地域を動かす例は稀である。

課外活動

- 「閑谷學」のテーマに基づき、小学校や町内施設で自らイベント等を開催する生徒が多数生まれた。
- ボランティアや地域プロジェクトへの参加は、必ずしも「閑谷學」や教科科目に関連したものではない。参加・体験自体の価値はあり、結びつけるべきかどうかは検討の余地がある。

コンソーシアム及び各部会等

- R元年度よりコンソーシアムである学校運営協議会を設置し、岡山県立高等学校初のコミュニティ・スクールとなったことで、地域と協働した学校づくりの持続可能性が高まった。
- 「地域協働探究」では、地域との関係づくりにおいてはカリキュラム開発等専門家が教職員とともにカリキュラム構築や授業実施をする体制が定着した。
- 年3回の4つの会議と38名の外部委員は学校規模に対して大きすぎる組織であった。